

## 《 論 説 》

絵本における語り手の視点：  
英語絵本とその日本語翻訳の質的分析

成岡 恵子

## 1. 序論

ディスコース研究において、同じ出来事に関して異なる言語で言語化されたものをデータとし、さまざまな言語現象を分析することにより、言語間の類似点・相違点や言語の特徴を明らかにする方法がある。具体的な研究方法として、同じ絵や映像を被験者に見せ、その内容を被験者の母語で言語化してもらったディスコースを分析する、という方法がある。代表的なものが、“Pear Story” (Chafe 1980) と呼ばれるプロジェクトである。これは、発話のない動画の映像を被験者に見せ、その後、映像の内容を話してもらい (ナラティブ)、そのナラティブ・データを英語、日本語、中国語、ドイツ語、ギリシャ語、マヤ語などで収集し、分析したものである。また、“Frog Story” プロジェクトと呼ばれる Berman and Slobin (1994) は、ある文字の無い絵本を被験者に見せ、「物語を作ってください」という指示の基に被験者に語ってもらったナラティブ・ディスコースを英語、トルコ語、ドイツ語、ヘブライ語といった複数の言語で収集して比較しているものである。このようなプロジェクトから、ナラティブの構造、代名詞や固有名詞を含む語彙の選択や使用、動作の表現方法やモダリティ表現の使用に関する言語間対照研究がなされてきた。

本稿では、一つのストーリーを英語と日本語で言語化する際に、どのような類似点・相違点が見られるのかを調べるため、ある英語で書かれた絵本とその日本語翻訳本 (以降、「英語版」、「日本語版」と記す) をデータとして用い、

ストーリーの言語化における両言語の特徴を明らかにする。もちろん絵本の原本と翻訳本というのは、もともと言語化されたものを別の言語で翻訳したもので、上記に示したことばのない映像や絵本を母語話者によって各言語で言語化されたものを分析するディスコース研究とは性質が異なる。しかしながら、灰島（2005）にあるように、絵本の翻訳とは、原文の内容を把握し、その場面のイメージを頭の中で立ち上げ、立ち上がった場面の中で、対象言語ではどう表現するかを考える必要がある（2005: 6）のものである。つまり、絵本翻訳とは一つの言語で書かれたものを、そのまま翻訳するのではなく、同じストーリーを、もう一方の言語で新たに作り上げるような性質がある。また、絵本とは繰り返し読まれることが多いため、それに耐えうる豊かな言語表現であること、大人が子供に読み聞かせる場合が多いので、耳で聞いたときに分かりやすいもの（灰島 2005: 4）でなければならず、書きことばでありながら、また翻訳といえども「読み聞かせ」という性質から、母語話者にとって受け入れられやすい、その言語にとって「自然な」表現が使用されなければならない。

更に、絵本とはストーリーがあるものであっても、幼い子供が理解しやすいような単純なものが多く、また使用される言語表現に関しても子供にも理解しやすく、真似をして発ししやすいような、簡単なものが選択される。このような単純なストーリーを簡単なことばで言語化する際にも、日英語間で異なる特徴が見られるのであろうか、見られる場合、両言語でどのような特徴が現れるのかを示していきたい。絵本や翻訳された絵本には、頁のレイアウトや頁数の制限から文字数の制限がある<sup>(1)</sup>。そのような数々の制限の中、注意深く選択されたことばにもその言語の特徴が見られるのかを明らかにしていきたい。子供たちが絵本を通してことばを学ぶことや、繰り返し読まれ（文字の読めない幼児でも）暗唱することを考えると、絵本とは言語習得に大きな影響があると考えられる。そういった意味で、絵本のテキストに見られる言語表現は、その言語を使う母語話者の話し方、書き方のスタンスにも大きく影響を与えるような重

(1) 絵本を翻訳する際の注意点の一つとして、灰島（2005）は、文のレイアウトなど印刷されたものがどのように見えるのかという視覚的なものにも注意を払う必要がある、としている（2005: 4）。

要な言語データであると考える。

本稿では、ある絵本の英語版、日本語版における「語り手」の視点に注目した分析を行う。具体的には、テキスト内で使用される(1)キャラクターを示す固有名詞および人称代名詞、(2)感情や感覚を表す主観的表現、(3)語りかけ表現、に注目し、ストーリーを語る語り手の視点の位置や動きについての質的分析を行う。今回注目する視点の移動に関する研究は、次節で見ると、小説をデータとした研究が多くなされている。絵本は本研究の分析で示すように、ストーリーが単純であり、またテキスト全体が短いため、全体像を把握することが、特に小説をデータとした場合に比べると、容易に可能である。今回は、一絵本のテキストをデータとするため、一般化をすることは難しいが、ミクロな視点から分析することで、一つのストーリーの中でどのような視点の動きがあるのか、ないのかを、詳細に記述することを試みる。そして日英語版の絵本における語り手の視点の違いを、日英語のコミュニケーションにおける話し手のスタンスの違いに関するモデル(井出 1998、2006)を基に考察する<sup>(2)</sup>。

## 2. 先行研究

本節では、日英語の小説や会話における語り手の視点の違いを日英語と比較した先行研究を見ていく。牧野(1978)は日本語の文学作品では現在形や過去形が入り混じることから、日本語の場合は主観的な視点(登場人物の視点)と客観的な視点(著者の視点)が入り混じることを指摘している。そして、時制を統一する傾向にある英語と比較すると、日本語の方が視点の動きが大きいと述べている。また、森田(1998)は、文学作品や日常的な表現から、日本語の話し手が「表現する自分自身を客体化する視点を持たない」のに対して、英語の話し手は「自分を対象化して述べる」と指摘している。

更に、池上(2000)は、認知言語学に基づき、ある状況が話し手によって言

---

(2) 絵本翻訳に関しても、一般的な翻訳と同様、訳者の翻訳に対するスタンスなどの問題が関係してくるが、本稿においては翻訳の問題は考慮しないものとする。

語化される場合に「客観的把握」と「主観的把握」という二通りの状況把握の方法があるとしている。「客観的把握」とは、言語化する状況を話し手が〈外〉から観察し、報告する〈客観的〉認識者の立場から捉えるもので、西欧語の話し手の状況把握にはこの傾向が高いとしている。一方、「主観的把握」とは、問題となる状況の〈内〉に身を置いて、自らがそれに関与し、経験している〈主観的〉な認識者として捉えるものであり、日本語の話し手は、この主観的な状況把握をもって言語化することが多いとしている。

菅沼（2001）は、児童小説『注文の多い料理店』とその英訳をデータに、上記の牧野（1978）や森田（1998）の挙げた日英語の視点の違いを分析している。小説の会話文以外のテキストを対象とし、「語り手」の役割を分析した結果、英語版では出来事を客観描写する、という語り手の働きのみが見られたのに対し、日本語版では客観描写する以外にも、（1）出来事の内側から登場人物の視点で描写する、（2）語り手が語り手自身の声を表す、（3）語り手が登場人物の立場から声を表す、（4）読み手へ（料理店からの）メッセージなどを直接提示する、（5）登場人物の視点から読み手を出来事へ引き入れる、といったさまざまな働きをしていることを示している。

本研究では、以上の先行研究を基に、絵本の英語版と日本語版がどのような視点から語られているかを分析する。分析対象を絵本の一作品に限ることにより、その作品の全体を分析し、作品全体を通してどのような視点の動きや働きがあるのかを明らかにしていきたい。

### 3. データ

本稿は、ある英語で書かれた絵本と、その翻訳本のテキストをデータとした分析を行う。原書となる英語の絵本 *Bears in Bed*（2012、テキスト Shirley Parenteau、絵 David Walker）はアメリカで出版された絵本であり、翻訳本『おやすみくまちゃん』（2012、福本友美子訳）は同時に日本で出版されている。（本稿では *Bears in Bed* を「英語版」、『おやすみくまちゃん』を「日本語版」と記す。）英語版、日本語版ともに30頁で構成されており、英語版は249語、日

本語版は528文字でテキストが構成されている。絵やテキストの配置は両言語版ともほとんど同じであるが、内表紙の絵本のタイトルが書かれている位置が、英語版は絵の上に配置されているのに対し、日本語版は絵の下に配置されているという違いが見られる。その他には、30～33行目の頁のテキストの配置が、英語版では二行に改行されているが、日本語版では、二行をスペースで区切ることにより、横並びに配置している（表1では、それぞれ二行と数える）。

データとして *Bears in Bed* 及び『おやすみくまちゃん』を選んだ理由は、第一にストーリー性があるもの、第二に繰り返し表現が少ないもの、そして第三に登場人物（キャラクター）同士の会話のやり取り（引用符や鉤括弧で示される発話）が主になったテキスト構成ではないもの、という点である。日英語版における語り手の視点の違いを見るために、ストーリーを語るという語り手の役割がある程度ある作品を選んだ。また、キャラクターの発話（引用符や鉤括弧書きにされているもの）の多い作品に比べると、少ないものの方が語り手の視点が観察されやすいため、発話が少ない作品を採用した。更に、繰り返し表現が多い作品では、同じ言い回しを何度も使用するため、分析の際にある言語表現の頻度を比較しにくくなる点も考慮した。片方の言語や文化でキャラクターがすでに確立しているような作品ではなく、新しい作品で、翻訳が片方の言語使用に引きずられたり、一方の言語の影響が強く出ている作品ではないものを選択した。

表1はデータとした絵本の英語版 *Bears in Bed* 及び日本語版『おやすみくまちゃん』のテキスト全文を載せたものである。実線で囲まれた部分は一頁内に書かれた文章である。多くの頁が見開きの片方の頁に絵、もう片方の頁に文章のみが書かれている構成になっている。絵の背景に文章が書かれている頁もあり、見開きの頁一面に絵が描かれ、絵の背景に文章が書かれている頁もある。見開きの左右の頁に絵とテキストがまたがる場合は、表1において点線で示した。また、本文において他のテキストより大きなフォントサイズで書かれている文字の部分は太字で示した<sup>(3)</sup>。

表1 英語版 *Bears in Beds* 及び日本語版『おやすみくまちゃん』のテキスト

<i>Bears in Beds</i>	『おやすみくまちゃん』
1. Five empty beds	1. ベッドがいつつ
2. are waiting there.	2. ならんでいるよ
3. It's time to sleep.	3. もうねるじかん
4. Where are the bears?	4. だれがねるのかな？
5. Here comes sleepy	5. ちゃいくまちゃん
6. Big Brown Bear.	6. ねむいねむい
7. He climbs into bed.	7. ベッドにはいつて
8. He's happy there.	8. おやすみなさい
9. Now comes drowsy	9. きいろいくまちゃん
10. Yellow Bear.	10. よっこいしょ
11. He takes the bed near	11. となりのベッドに
12. Big Brown Bear.	12. はいったよ
13. Fuzzy whirls in	13. ふわふわくまちゃん
14. like a circus bear.	14. ひょいととびのり
15. She swirls into bed	15. サーカスみたいに
16. with a twirly flair!	16. くるりとまわる
17. There's a blur of fur.	17. ちよっとちよっと
18. Is that a bear?	18. ごろんごろんしてるのだから？
19. Yes!	19. おやおや
20. It's Calico tumbling	20. およよくまちゃんと
21. with Floppy Bear!	21. ぼちぼちくまちゃんだ！
22. "It's time to sleep!"	22. 「もうねるじかんだよ！」
23. says Big Brown Bear.	23. ちゃいくまちゃん
24. He gets out of bed	24. ベッドからでて
25. to untangle that pair.	25. ふたりをつかまえた
26. He tucks them in,	26. ベッドにねかせて
27. then Big Brown Bear	27. おふとんかけて
28. blows a kiss good-night	28. ひとりひとりの
29. to all four bears.	29. ほっぺにチュー
30. Out goes the light!	30. でんきをけして
31. It's cozy in there.	31. おやすみなさい！
32. Five warm beds	32. みんなぐっすり
33. hold five tired bears.	33. いいきもち

34. Whoosh	34. ひゅーっ
35. goes a sound	35. まよなかに
36. in the middle of the night.	36. とつぜんきこえた
37. Big Brown Bear	37. へんなおと
38. wakes up in a fright!	38. いったいなあに？
39. Whoosh! Whoosh! Whoosh!	39. ひゅーっ！ ひゅーっ！ ひゅーっ！
40. Moans fill the air.	40. かぜのおとかな？
41. Is that the wind,	41. なんだからこわい！
42. Big Brown Bear?	
43. Oh, no!	42. がた がた がた
44. Rattle, rattle, rattle	43. いすのしたから
45. from under the chair.	44. へんなおとがする
46. He turns on the light	45. でんきをつけて
47. to see what's there.	46. みてみよう
48. It's Fuzzy, Yellow,	47. なあんだ
49. and Calico Bear!	48. くまちゃんたち
50. Floppy peers from	49. こわくなって
51. under the chair!	50. めがさめたんだね
52. They heard the wind.	51. ねえ、きこえたよ
53. They had a scare.	52. かぜのおと
54. They're afraid to stay	53. なんだからこわくて
55. in their beds over there.	54. ねむれないの
56. "Come snuggle close,"	55. 「じゃあ、こっちにおいで」
57. says Big Brown Bear.	56. ぎゅっとぎゅっとくっついて
58. So the four little bears	57. いっしょにいれば
59. scramble up there.	58. だいじょうぶ
60. He reads them a story	59. ちゃいくまちゃん
61. about three bears	60. おはなしよんで！
62. and a pesky girl	61. 3びきのくまと
63. with golden hair.	62. おんなのこのおはなし
64. Their eyes slowly close.	63. だんだんおめめがかくっついて
65. Soft snores fill the air	64. ねむいねむいくまちゃんたち
66. from one big bed full	65. ひとつのベッドで
67. of five sleeping bears.	66. おやすみなさい！

(3) 前半部分は日英語版ともに同じ行数であるが、39行目からの頁において、英語版は4行、日本語版は3行になっているため、それ以降は日英語版の行番号が異なる。

ストーリーは次のようなものである：五頭のクマが、並べられた五つのベッドにそれぞれ入り、一度は寝るが、真夜中に風の音が聞こえ、怖くて起きてしまう。そして結局は一つのベッドに全員が寝る、というストーリーである。絵本に登場するキャラクターは〈Big Brown Bear / ちゃいくまちゃん〉と、四頭の小さいクマたちであり、メインキャラクターである〈Big Brown Bear / ちゃいくまちゃん〉は、他のクマより大きく描かれ、テキストからは明示されないものの、親クマのような存在として描かれている<sup>(4)</sup>。前半（1～33行目）はそれぞれのクマの紹介をしながら、ベッドに入る様子が描かれている。後半（英語版34～67行目、日本語版34～66行目）は突然大きな風の音がして、それに驚いたクマたちが怖がり、最終的には全員が一つのベッドにくっついて眠りにつく様子が描かれている。このストーリーが語り手によって語られているが、その語り手の視点の動きに関して、日英語に相違点があることを明らかにしていく。

#### 4. 分析

本節では、語り手の視点の位置や動きについて、英語版 *Bears in Bed* 及び日本語版『おやすみくまちゃん』のテキストの分析を行う。英語版では語り手が独立して、登場するキャラクターや状況を客観的に描写している部分がほとんどであるのに対し、日本語版では語り手の視点からストーリーを描写している場面もあるものの、語り手がストーリーの中に入り込んで登場するキャラクターであるクマたちに話しかけたり、読み手に話しかけたり、また語り手の視

(4) 英語版では、メインキャラクターである〈Big Brown Bear〉は“he”という男性の人称代名詞で表現されている。日本語版では後に見るように、人称代名詞が使用されないため、性別は明示されていない。中村（2007）にあるように、日本語の小説を含むフィクションの会話や日本語に翻訳された会話では話者が女性の場合にはいわゆる「女性語」と言われる表現が多用されるが、今回データとして用いた日本語版のテキストで、〈ちゃいくまちゃん〉の発話文（鉤括弧付きの文）である「もうねるじかんだよ！」(22) 及び「じゃあ、こっちにおいで」(56) からは明らかな「女性語」の使用は見られず、その他〈ちゃいくまちゃん〉に視点が移っている部分でも際立った「女性語」の使用は見られない。そのため、英語版（原文）に従って〈ちゃいくまちゃん〉を男性として解釈したか、もしくは意図的にどちらともとれるように表現していると考えられる。



点がメインキャラクターである〈ちゃいくまちゃん〉や、その他の四頭のクマたちに移って話をしたりするなど、語り手の視点がコンテキストに内存し、視点がキャラクターに移るといった動きが頻繁に見られた。以下に語り手の視点の位置や動きを見るため、(1) キャラクターを示す固有名詞及び人称代名詞、(2) 感情や感覚を表す主観的表現、(3) 語りかけ表現(感嘆詞、終助詞やあいさつ表現)についての分析を行う<sup>(5)</sup>。

#### 4.1 キャラクターを示す固有名詞及び人称代名詞

人称表現は、小説などの語り部の視点の位置や動きを見るにあたって重要な言語要素の一つである(守屋 1992)。そこで、本稿で分析する絵本のテキストにおいて、両言語版でキャラクターを指し示す固有名詞の表現や人称代名詞がどのくらい使用されているのかを見てみた。英語版では固有名詞が15回、人称代名詞が15回(主格11回、目的格2回、所有格2回)使用されていた。日本語版では、固有名詞が8回使用されていたが、人称代名詞の使用は見られなかった<sup>(6)</sup>。日本語は、コンテキストから分かる主語や目的語などは省略する言語であることは周知のことであり、絵本に限った特徴ではない。しかしながら、そのことでストーリーがどのように語られるか、どのような語り手の視点として表現されているかに注目し、以下に質的分析を行う。

ストーリーの前半では登場するキャラクターを紹介しながらそれぞれ五頭のクマたちがベッドに入っていく場面が描かれている。その場面では英語版、日本語版ともに、語り手の客観的な視点からの描写が多くみられた。しかし、英語版ではほとんどの頁において一貫して語り手が客観的に場面を見て説明しているのに対し、日本語では一頁の四行すべてが語り手の視点から述べられてい

(5) 分析の中で、引用符“words”と鉤括弧「ワード」は本文からの引用であることを示す。山括弧〈words / ワード〉は説明の中で使われる固有名詞を示し、丸括弧(00)内の数字は表1におけるテキストの行番号を示す。本文からの引用部で二つスペースが空いている部分は、絵本のテキスト内で改行されていることを示す。

(6) 日本語版の固有名詞には「くまちゃんたち」という集合的に使われた表現も含むが、英語版で使用されている“bears”という表現は固有名詞の使用には含まない。

るものは少なく、語り手の視点とキャラクターの視点が共在したり、語り手がキャラクターたちや読み手に話しかけるものも見られた。まず、英語版の固有名詞及び人称代名詞の使用について、同じ場面の日本語版との比較をしながら見ていく。

5～8行目は、メインキャラクターである〈Big Brown Bear / ちゃいくまちゃん〉が初めて登場する場面であるが、英語版では固有名詞“Big Brown Bear”に続き、“he”という人称代名詞を使い、キャラクターを説明している。9～12及び13～16行目の同じ形式を取り別のキャラクターが登場する頁でも、初めに固有名詞“Yellow Bear,” “Fuzzy”が使用され、その次の文章において人称代名詞“He”や“She”を用いてどのようにベッドに入ったかなどのキャラクターの動作が説明されている。このように英語版では、語り手がキャラクターの名前を固有名詞で紹介し、そのキャラクターについて、人称代名詞で表現された主語に動詞をつなげる形式で説明を加えるような、語り手の客観的な視点から述べられているのが分かる。同じ場面において日本語版でも「ちゃいくまちゃん」(5)、「きいろいくまちゃん」(9)、「ふわふわくまちゃん」(13)と初めて登場するキャラクターを固有名詞で紹介しているが、その後同じ頁内でキャラクターを指し示す名詞や代名詞は使用されていない。

人称代名詞に関連して、同じダイクシス表現である“He’s happy there.”(8)の“there”の使用にも注目したい。この頁の初めには、動詞“comes”を用い、“Here comes sleepy Big Brown Bear.”(5-6)と語り手が見ている場面(ここではベッドルーム)にキャラクターが入ってきたことを表現しているにも関わらず、クマが入ったベッドを“here”ではなく、“there”と表現しているのである。これはまさしく、語り手がコンテキストの外から客観的に場面を眺めて状況を説明していることの表れであると考えられる。同様に“there”の使用が31行目の“It’s cozy in there.”や58-59行目の“So the four little bears scramble up there.”にも見られ、コンテキストの外から語り手が客観的にその場面を見て述べていることが窺い知れる。

次に、22～29行目の英語版と日本語版の人称表現を比べながら見ていく。こ

の場面の英語版では23、27行目に固有名詞の“Big Brown Bear”、24、26行目に同じキャラクターを人称代名詞“*He*”で表現している。それに対して、日本語版では、23行目に「ちやくまちゃん」と固有名詞が一度言語化されるのみである。絵本では文章だけでなく、絵も情報を伝える手段のひとつである。22～25行目の頁では、大きな茶色のクマ、つまり〈Big Brown Bear / ちやくまちゃん〉がベッドから出て、小さな二頭のクマを持ち上げている絵が描かれているため、誰が何をしているのかは主体を言語化しなくとも解釈することは十分可能である。また、26～29行目の絵ではひとときわ大きい〈Big Brown Bear / ちやくまちゃん〉が他の四頭のクマたちのベッドの脇からキスをしている場面が描かれている。22行目の発話『『もうねるじかんだよ!』』(テキスト本文においても鉤括弧で書かれている)の後に「ちやくまちゃん」と発話主が明記されているが、その後の行為(ベッドから出る、二頭のクマをつかまえる)については主体が誰であるかは絵からも明らかであり、日本語版では言語化されていない。そのような場面であっても英語版では同じ頁内に固有名詞と人称代名詞を使用している。そしてその使用により、英語版では、主体を明示しない日本語版に比べ、それぞれの場面が語り手の引いた視点から語っている姿勢として表現されているのである。

34～38行目の頁は、後半に入りストーリーに変化がある場面であるが、この頁はメインキャラクターである〈Big Brown Bear / ちやくまちゃん〉の怖がっている顔が頁全体に大きく描かれている。英語版を見てみると、音がした後、“Big Brown Bear wakes up in a fright!” (37-38) と語り手が〈Big Brown Bear〉が怖がっている様子を客観的に描写している。そして“Is that the wind, Big Brown Bear?” (41-42) と語り手の視点から、キャラクターである〈Big Brown Bear〉に問いかけていることが分かる。ただし、この部分はキャラクターに話しかけていることから、語り手の視点がストーリーの中、つまりコンテキスト内に多少なりとも入り込んでいることがうかがえる。

英語版の52～55行目の頁は全ての行に人称代名詞が使用されている。そして“*They*”という人称代名詞を使い、前頁で出てきた四頭のクマたちがなぜバツ

ドから出てきたのかを説明している。“They”を3回、“their”を1回同じ頁内で使用しており、語り手がクマたちの思いや行動を客観的に説明しているものとなっている。それと共に、52、53行目は音が似た動詞を使い、同じ構文にすることで、リズム感のある表現となっている<sup>(7)</sup>。同じ部分の日本語版を見てみると、51～54行目では、固有名詞や人称代名詞は全く使用されていない。そして「ねえ、きこえたよ」(51)、「ねむれないの」(54)という表現からも分かるように、視点が〈くまちゃんたち〉に移り、〈ちゃいくまちゃん〉に話しかけるような場面として描かれ、英語版とは全く違う視点からストーリーが語られている。後に詳しく述べるが、日本語版では、「ねえ」や「きこえたよ」、「ねむれないの」に見られる終助詞の使用や、53行目の「こわくて」という感情を表す主観的表現など、さまざまな言語要素から視点がクマたちに移ったことがうかがえる。

それでは、日本語版ではどのような場面でキャラクターの固有名詞が使われているのだろうか。先に述べたように、合計8回固有名詞が使用されていたが、そのうちの5回が、前半のキャラクターが登場した場面で、名前と共にそれぞれのキャラクターを紹介している部分での使用であった(5、9、13、20、21行目)。以下に残り3回の使用の場面を見てみる。

一つ目は、22行目の『『もうねるじかんだよ!』』(テキスト本文でも鉤括弧で書かれている)という発話の後に、23行目で「ちゃいくまちゃん」と固有名詞が使用されている場面である。22行目の発話、そして24-25行目にあるように、ベッドから降りてじゃれあっていたクマたちをつかまえるという行為をしたのは〈ちゃいくまちゃん〉であることを示している。この場面は、「ベッドからでて」(24)「ふたりをつかまえた」(25)という行為の説明と共に、語り手の視点から客観的に述べられている場面である。

この22～25行目、そしてそれに続く26～29行目の頁は全て〈ちゃいくまちゃん

(7) 多くの英語の絵本や詩、歌詞がそうであるように、本稿で扱う作品のテキストも韻を踏んでおり、英語版においては表現選択にあたり押韻が大いに関係することが分かる。しかしながら紙面の都合上、本稿ではその点については議論しない。

ん〉の行動について語られている場面であるが、日本語版では23行目の1回のみ、キャラクターを指し示す表現が使用されている。英語版では、先に見たように、23、27行目に“Big Brown Bear”、24、26行目に“He”が使用され、同一キャラクターを指し示す表現が計4回使用されている。この場面は、絵を見れば語り手の述べる動作の主が誰なのかが一目瞭然であり、日本語版では一度しか動作主が言語化されていない。しかし、ここで主体を示さないことにより、語り手からの視点なのか、それとも〈ちゃいくまちゃん〉からの視点なのかが曖昧になり、読み手がキャラクターになりきって物語に入り込むことができる、という効果があると考えられる。

二つ目の使用は、48行目の「くまちゃんたち」という四頭のクマたちを指し示す名詞の使用であるが、この場面も語り手の視点なのか、それとも〈ちゃいくまちゃん〉の視点に移ったのかが曖昧であり、どちらとも取れる表現方法となっている。しかし、注目したいことは、後にも詳しく述べるが、「くまちゃんたち」の前後には感嘆表現「なあんだ」(47)や「めがさめたんだね」(50)の終助詞の使用に見られるように語り手がストーリーに登場するキャラクターたちに直接語りかけるような表現が見られ、語り手からの視点であっても、コンテキストに入り込み、コンテキストの内側から述べている視点であることが分かる。

最後の固有名詞の使用である59行目「ちゃいくまちゃん」は、〈くまちゃんたち〉から〈ちゃいくまちゃん〉に向けられた呼称の表現であり、語り手の客観的な視点を示すものではなく、逆に視点が〈くまちゃんたち〉に移っていることを明示する使用となっている。

以上のように、絵本の中で使用された固有名詞や人称代名詞の使用を追ってみると、英語版では使用頻度が高く、日本語版では低くなっていた。そしてそれにより、英語版は語り手が客観的に外の視点から眺めてストーリーを描写しているような表現となり、また日本語版では、語り手の視点からのみ語られるのではなく、キャラクターに視点が移りキャラクターの声がところどころに入り込んだストーリー展開として表現されていることが分かった。

## 4.2 感情や感覚を表す主観的表現

次は日本語版に見られる特徴である、主に形容詞による主観的な表現の使用について見ていく。まずは、前半の頁で〈ちゃいくまちゃん〉が登場した後の「ねむいねむい」(6)という表現に注目したい。森田(1998)は日本語の形容詞、「特に感情や感覚を表す形容詞は、主観的で自己の立場で事態をとらえようとする」(1998: 19)ものが多く、話者自身のことであれば「(私は)うれしい／寂しい／痛い」と形容詞が使えるが、第三者のことであれば、「彼はうれしがっている／寂しそうだ／痛がっている」などと動詞を使って言い換えたり、「…そうだ」を付けて客体化しなければならないとしている。池上(2000)も、日本語の表現で「主観的把握」が目立つ言語使用として、感覚や感情を表す表現があると述べ、「寒い」などの表現は一人称(「私」など)への強い拘りを示し、「(私は)寒い」と表現するが、「あなたは寒い」や「彼女は寒い」という言い方は見られないとしている。

この場面に出てくる「ねむいねむい」という表現も、主観的形容詞であり、話者自身のことに関して「(私は)眠い」と比べると「彼は眠い」は不自然に感じられ、「らしい／ようだ」などを付け加えたほうが自然な表現となる<sup>(8)</sup>。そのように考えると、6行目で使用された「ねむいねむい」はキャラクター〈ちゃいくまちゃん〉の視点から語られていることが分かる。その他にも、キャラクターたちの感情を「いきもち」(33)、「なんだかこわい」(41)、「なんだかこわくて」(53)と主観的表現を用いて表現されている場面が見られ、それぞれ視点がキャラクターに移って表現されていることが分かる。

池上(2000)では、一人称への強い拘りを示す日本語とは異なり、英語では“I am cold.”と同じように“You are cold.”や“S/he is cold.”と表現することができ、感覚や感情を表現する言語要素であっても一人称に使用が限定されないとしている(2000: 280)。そして本データのテキストでも“sleepy Big Brown Bear”(5

(8) もっとも、母親が自分の乳幼児のことを「この子、今、ねむいの」などと主観的に表現することがあるが、これは自分の子供と一体化させた視点であり、また一体化できるほど近い存在だからこそ使われる表現である。

-6)、“He’s happy there.” (8)、“five tired bears” (33)、“Big Brown Bear wakes up in a fright!” (37-38)、“They had a scare.” (53)、“They’re afraid to stay.” (54)といったように感覚や感情を表す表現が三人称である固有名詞や代名詞と共に使用されており、日本語版のように視点の移動は伴っていない。

日英語版においていかにキャラクターの感情や感覚が表現されているかを、比べながら見ていく。英語版の34～42行目、日本語版の34～41行目では、日英語版で頁をまたいで相当する表現の出現が前後するが、英語版の客観的描写と日本語版の主観的表現が明確に表れる場面である。34行目からの頁の絵をみると、〈ちゃいくまちゃん〉の怖がっている顔の表情が頁一面に描かれ、38行目からの頁には〈ちゃいくまちゃん〉が毛布に潜り込み、怖がっている様子が体全体を描くことで表現されている。英語版では、先に見たように、“Big Brown Bear”を主語にして“Big Brown Bear wakes up in a fright!” (37-38)とキャラクターが怖がっている様子を客観的に表現している。それに対し、日本語版ではキャラクターが怖がっている様子を、「なんだかこわい」(41)と主観的な表現を用いて、キャラクターの視点から述べられている。また、真夜中に聞こえてきた音が何の音なのかを暗示する際に、英語では41-42行目に“Is that a wind, Big Brown Bear?”と語り手が〈Big Brown Bear〉に話しかけるような表現方法を取っているため、語り手の存在が一層感じられる。日本語では相当する部分が38、40行目に分かれて言語化されているが、「かぜのおとかな?」(38)、「いったいなあに?」(40)と不思議に思っている〈ちゃいくまちゃん〉の声のように表現されている。この日本語版の表現は誰の発話であるかが曖昧であるが、語り手ではなくキャラクターの視点から述べられたように受け取る方が自然である。

さらに、英語版では音がした場面を“Whoosh goes a sound” (34-35)と部屋中に音が響き渡った様子を見て説明したり、次の頁では激しく音が響く様子を“Moans fill the air.” (直訳すると「うなるような音が部屋いっぱい響き渡った。」)と場面を客観的に言語化している。それに対し、日本語版では「とつぜんきこえた へんなおと」(36-37)と感覚を表す表現を用いて言語化されている。英

語版のような「音がした」という表現方法とは異なり、日本語版では「きこえた」と表現し、一人称への強い拘りを示す主観的表現を用いることで、視点を〈ちゃいくまちゃん〉に移し表現している。

以上のように、英語版では固有名詞や三人称人称代名詞と共に感情や感覚を表す表現を使用し、客観的に表現していたが、日本語版では一人称に拘りを持つとされる感情や感覚にかかわる表現を使うことにより、語り手の視点がキャラクターに移り、その場面におけるキャラクターの感情や感覚が表現されていた。

### 4.3 語りかけ表現

今回見た絵本のテキストに限らず、日本語の小説などにおいても、語り手は単に状況を描写するという「語り」だけでなく、読み手に語りかけるような表現を使うことがある。日本語の児童小説とその英語翻訳をデータとして語り手の声について論じた菅沼（2001）では、語り手が読者に語りかける表現、例えば「そしたら、どうです。」などの表現は、日本語の童話にはしばしば見られるのに対し、翻訳された英語ではそのような表現がそのまま訳されたものは見受けられないとある（2001: 77）。今回データとして用いた絵本のテキストにおいても、英語版と日本語版を比較してみると、日本語版の方がさまざまな手段で読み手に語りかけていることが分かる。また、日本語版のテキストからは視点があるキャラクターに移り、そこから別のキャラクターに語りかけるような言語使用も見られた。今回のデータでは引用符や鉤括弧を使って表現されたキャラクターの発話部分がそれぞれ二か所見られたが（英語版22、56行目、日本語版22、55行目）それら以外の語りの部分における語りかけ表現の使用を見ていく。

絵本は前述のように、大人が子供に向かって読み聞かせする 경우가多く、一人で読むことを想定して作られた小説に比べて、語りかける表現が多く見られると考えられる。本研究のデータの中にも疑問文の形を取り、問いかける表現が見られた。そしてそれは日英語版ともに、似たような表現が使用されていた。



疑問文が使われている表現は、前半では、“Where are the bears?” (4) 「だれがねるのかな？」(4) と、“Is that a bear?” (18)、「ごろんごろんしてるのだあれ？」(18)、後半の場面が変わるところで、英語版は“Is that the wind, Big Brown Bear?” (41-42) と二行に渡っての疑問文であるが、日本語版は「いったいなあに？」(38) と「かぜのおとかな？」(40) と二回に分けて疑問文を使って表現している。4行目の疑問文は両言語版において、語り手が疑問を表現しているが、英語版の18行目“Is that a bear?” が語り手の疑問として表現されているのが明らかなのに対し、日本語版の「ごろんごろんしてるのだあれ？」は語り手の視点なのか、それとも〈ちゃいくまちゃん〉の視点なのか曖昧である。また、誰に疑問を投げかけているのかを見てみると、英語版の41-42行目は固有名詞を付加することで問いかける相手を〈Big Brown Bear〉に特定しているが、それ以外は誰に投げかけているのかが明らかではない。そのため、絵本の中のキャラクターに聞いているようにも取れるが、読者に投げかけているようにも取れる。また、この41-42行目の英語版では“Big Brown Bear” と疑問を投げかける相手を特定しているが、日本語版では、原本の英語版より一行余らせても問いかける相手を〈ちゃいくまちゃん〉に特定せず、誰に疑問を投げかけているのかを曖昧にしている点は興味深い。

英語版においては、上記の疑問文を用いて語りかける表現以外には、感嘆表現が“Yes!” (19) と“*Oh, no!*” (43) の二か所使用されている。日本語版においては、「おやおや」(19) と「なあんだ」(47) であった。これらの感嘆表現からは、語り手がストーリー（つまりコンテキスト）に入り込み、感じたことを表現しているように言語化されており、菅沼（2001）の言う「語り手が自分自身の声を表す」（2001: 87）働きをしていると言える。また、日本語版の「おやおや」(19) や「なあんだ」(47) は〈ちゃいくまちゃん〉の視点から述べられていると解釈することもでき、その場合は「登場人物の立場から声を表す」（2001: 87）働きをしている。

日本語版ではその他の言語要素によっても、キャラクターや読み手に語りかけるような表現になっている部分が見られる。第一に、終助詞の使用、第二に

「おやすみなさい（!）」というあいさつ表現の使用である。まずは終助詞の使用について見ていく。疑問詞以外の終助詞の使用は、「よ」が3回、「ね」が1回、「ねえ」が1回、「の」が1回の計6回使用されていた。

終助詞とは日本語のインターアクションの中ではなくてはならない言語要素であり、対人関係を調整する機能を持つ、つまり相手の存在があるからこそ使用されるものである。このモダリティを示す言語要素の一つである終助詞は、命題的・指示的意味 (referential meaning) を持たず、社会文化的・非指示的意味 (sociocultural/non-referential meaning, cf., Silverstein 1976) のみを持つ言語要素であり、聞き手を含む周りとの関係性から意味が決まる。このような終助詞は日本語の、特に話しことばではなくてはならない言語要素である。白川 (1992) は、終助詞「よ」の機能を「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることをことさら表明することである」(1992: 7) と述べており、また小説における終助詞の使用を見た甘露 (2004) では、語りの文では終助詞「よ」は使用されていないという結果を示している。小説の語り部には使用されない終助詞が、絵本においては語りの部分にも使われているということは、「語り手」の存在が、小説において単に状況を語りストーリーを進める「語り手」の役割とは異なる働きをしていると考えられる。

3回使用された終助詞「よ」であるが、これは終助詞「ね」としばしば対比して説明され、話し手の発話内容に対して話し手のみはその情報を所有する場合に「よ」、聞き手と共有する場合には「ね」が使用されると一般的に言われている。つまり、「よ」は語り手が何か聞き手に説明をしたり、場面を描写する際に、聞き手に向かって使われる終助詞である。テキストからみても、「ベッドがいつつ ならんでいるよ」(1-2)、「となりのベッドに はいったよ」(11-12) と場面を読み手に説明している場面で使われている。このような場面で終助詞「よ」を使うことにより、読み手を意識したものになっていることは、終助詞抜き表現「ベッドがいつつならんでいる (ならんでいます)」や「となりのベッドにはいった (はいりました)」と比べると明らかである。また、51行目では「ねえ、きこえたよ」と〈くまちゃんたち〉が〈ちゃいくま

ちゃん〉に話しかける中で使用されており、相手の注意を引くための表現「ねえ」と共に、相手に話しかけている様子が表現されている。終助詞「ね」は先に述べたように、相手も知っていることや、相手に何か確認するときを使用される終助詞であり、「こわくなって めがさめたんだね」(49-50)では、単に真夜中にベッドから出た理由を描写するのではなく、聞き手である〈くまちゃんたち〉に確認するように表現されている。

もう一つ、日本語版で使用されている「おやすみなさい(!)」というあいさつ表現に注目したい。日本語版にはこの表現が3回(8、31、66)使用されているが、英語には“Good night”という表現は一度も使用されていなく、全く異なる表現が使われている。あいさつ表現とは相手があってはじめて使用される語りかけ表現の一種であるため、語り手からキャラクターに語りかけている、もしくはキャラクターの視点から別のキャラクターや読み手に語りかけているとも解釈できる。また、保育者が子供に読み聞かせをするという場面を考慮すると、読み手や聞いている子供がキャラクターに語りかけるような場面づくりのために加えられたと考えることも可能である。

以上、英語版と日本語版のテキストの中で語り手の視点がどこにあるのかを(1)キャラクターを示す固有名詞および人称代名詞、(2)感情や感覚を表す主観的表現、(3)語りかけ表現、に注目した質的分析を試みた。その結果、英語版では、日本語版と比べると固有名詞や人称代名詞が頻繁に使用され、その使用により語り手が場面を客観的に見てストーリーを語っている様子が表現されていた。それに対し日本語版では、キャラクターの感情や感覚を、一人称との強い繋がりを持つ主観的表現を用いて言語化したり、感嘆表現や疑問文の表現以外にも、終助詞の使用やあいさつ表現を使って語りかけるような言語要素を多用することにより、語り手の視点がキャラクターに移ったり、語り手が話しのコンテキストに入り込み、キャラクターや読み手に語りかけるような言語化がなされていた。

## 5. 考察

前節の分析で見たように、英語版 *Bears in Bed* では語り手がコンテキストの外から引いた視点で場面を描写する傾向にあるのに対し、日本語版『おやすみくまちゃん』では語り手がコンテキストの中に入り込み、ときには登場するキャラクターの視点となって話をしたり、コンテキストの中からキャラクターや絵本の読み手に語りかけたりするような表現が取られていた。本節では、この英語版と日本語版の語り手の視点の特徴について、コミュニケーションにおける話し手の視点に関するモデルを基に考察する。

井出（1998、2006）は、話すこと（書くこと）に対する話し手（書き手）のスタンスが、西欧と東アジアでは根本的に異なることを、英語話者と日本語話者の比較から論じている。西欧では、話し手は、あたかも神が空から地上を見下ろしているような視点でスピーチ・イベントをとらえる。空からは全体像が見えるので、全体をまとめて客観的に額縁にいれて見るようにとらえて話す、としている。

それに対し、日本語の話し手は、空からの視点ではなく、自分の周りとの「関係」を気にしながらスピーチ・イベントをとらえる。発話をするとき、話し手はコンテキストの中の一要素としてコンテキストに埋没している。発話者を行為者とみる西欧とは異なり、話し手は、コンテキストの一要素として他のコンテキスト要素との調和・融合を果たしつつ、自分の言いたいことを表現している。

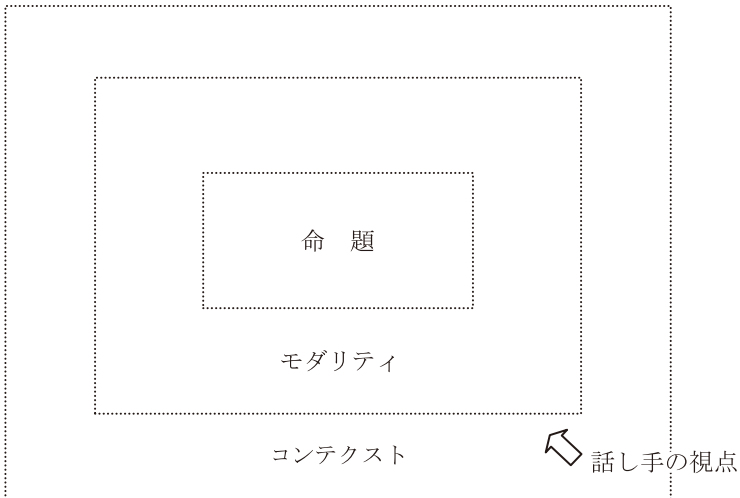
この日英語における「スピーチ・イベント」と「話し手の視点」の違いを表したのが図1と図2である。スピーチ・イベントは、命題、モダリティ、コンテキストの三段階の要素から成り立っており、その要素と視点の関係が英語と日本語では異なることを図で示したものである。モダリティは話し手の態度表明手段の言語表現のことであり、命題を話し手がどうとらえているかという、態度を示すもののことである。

英語話者のコミュニケーションでは図1にあるように、話し手の視点がス  
(461)



↖ 話し手の視点

図1 英語のスピーチ・イベントと話し手の視点 (井出 1988、2006)



↖ 話し手の視点

図2 日本語のスピーチ・イベントと話し手の視点 (井出 1998、2006)

ピーチ・イベントの外側にある。また、英語では命題の割合が大きく、モダリティとコンテキストの割合は小さい。この図が示すように、英語で話しをするときには、話し手はスピーチ・イベントと距離を置いたところから客観的に見て、スピーチ・イベントにおいて最も大切な要素である命題を、引いた視点から伝えたり、解釈したりすることに重点を置いている。

それに対して、図2にあるように日本語話者のコミュニケーションでは、まず視点がコンテキストの内側にあり、コンテキストの一部として存在している。それぞれの要素を見てみると、英語と比べて命題内容の割合が小さく、反対にモダリティの割合が大きい。加えて、三つの要素の境界線が点線で示されている点に注目したい。これはそれぞれの要素が完全に独立しているのではなく、お互いに影響しあっていることを意味する。つまり、日本語の話し手は、その他のコンテキスト要素と自らを分離せず、命題内容を伝えると同時にそれ以外のコンテキスト情報やモダリティ情報を伝えている。そして、同じコンテキスト内にいる聞き手も、その命題内容とコンテキスト情報を直観的にとらえることができるのである。更に、この日本語話者のスピーチ・イベントのとらえ方が、日本語にはさまざまなコンテキスト情報を伝える言語要素が構造の中に備わっていることと関係するとしている（井出 1998、2006）。

前節の分析では、絵本をデータに、英語版と日本語版で、どのように言語化が異なるのかを語り手の視点を中心に分析した。その結果、英語版では固有名詞や人称代名詞の多用からも分かるように、ほとんどが客観的な視点から語り手が状況を描写していた。それに対し、日本語版では、語り手の視点はコンテキストの中に入り込み、主観的表現を用いて感情や感覚を表現することでキャラクターの声となり語ったり、感嘆表現、終助詞やあいさつ表現を用いてキャラクターや読み手にコンテキストの中から語りかけるような視点で表現されていた。

英語版にも、感嘆表現の使用から語り手の声が表示されたり、キャラクターに語りかけるような表現を使うことで、臨場感を伝えている場面も見られた。しかし、日本語版では、頻繁に語り手の視点がキャラクターに移ったり、語り

手がキャラクターや読み手に語りかけることでコンテキスト内に読み手を引き込むようにして、ストーリーが語られていた。つまり、英語版では図1にあるように、語り手の視点はコンテキストの外にあり、場面を客観的にとらえながら、ストーリーを語っていたのに対し、日本語版では語り手の視点が図2のように場面に入り込み、そこから状況を描写したり、キャラクターの視点になって表現したり、またはキャラクターと一緒に感情や感覚を表現していた。このように、絵本というジャンルにおける単純なストーリー、そして子供が理解できるような短く簡単な言語表現を使用するテキストにおいても、井出(1998、2006)のコミュニケーションにおける英語話者と日本語話者のスタンスの違いが反映されていることが明らかとなった。

子供は主に大人(親をはじめとする保育者)のコミュニケーションを見真似てことばを習得しているが、その際に、保育者とのやり取りの中で使用される絵本も一つの重要な言語材料となる。言語習得の過程とは、ことばの命題的・指示的意味(referential meaning)だけでなく、そのことばをどのように使うか、そのことばを使用することでどのような社会文化的または非指示的意味(sociocultural/non-referential meaning)が生じるかといった、言語使用とコンテキストの関係も同時に身に付けて行くプロセスである(“language socialization,” Ochs 1986)。

例えば、どのような場面で主語や目的語を言うか、又は言わないか、どのように感情や感覚を表現するか、ということは、言語の命題的・指示的意味の知識だけでは「母語話者らしい」言語化が不可能である。また、英語話者の間では「話し手」と「聞き手」の役割分担が明確に分かれており、「話し手」がフロアを取り「聞き手」は割り込みをしないという会話のパターンがあるのに対し、日本語話者は「話し手」と「聞き手」が共同で会話を進めていく傾向があるが(e.g., 水谷 1993)、このような会話のパターンも、語り手一人の視点からストーリーを語る英語版と、語り手とキャラクターと一緒にストーリーを語り、更に読み手をもコンテキストに引き入れつつ物語を進めていく日本語版と繋がる場所がある。

子供の言語習得の過程において、その時その時で異なる体験をする日常の会話とは異なり、同じ場面を同じ言語表現で繰り返し読む（聞く）絵本とは、単語や言い回しを覚えるだけでなく、その言語らしい使い方を身に付ける教科書のような役割を担っていると考えることができる。言語習得途中の読み手（聞き手）には、誰が動作主であるか、誰が感じたことなのか、明示的に言語化したほうが理解しやすいと考えることもできるが、そのような場面であっても、日本語では主語を言語化せず、またさまざまな視点からストーリーを進めていくなど、そのままの特性を維持しつつテキスト化することにより、その言語を話すコミュニティの一員として、社会化されていく助けを絵本が担っているのではないかと考える。

## 6. 結論

本稿では、英語で書かれた絵本とその日本語翻訳本のテキストをデータとし、ストーリーの「語り手」の視点に注目した分析を行った。語り手の視点の位置や動きを観察するため、（１）キャラクターを示す固有名詞及び人称代名詞、（２）感情や感覚を示す主観的な表現、（３）語りかけ表現、の使用を日英語版で比較した。その結果、英語版ではキャラクターを示す固有名詞や人称代名詞が頻繁に使用され、それにより語り手がコンテキストの外側から場面を見て、客観的に描写する視点が観察された。それに対し、日本語版では、語り手は客観的に描写する視点だけでなく、感情や感覚を表現する際に主観的な形容詞表現などを用い、視点がキャラクターに移り表現されていることも多く見られた。終助詞や「おやすみなさい」というあいさつ表現を使用することにより、語り手自身もコンテキストに入り込み、キャラクターや読み手に語りかけのような表現方法もされていた。この両言語版の相違点を、英語話者と日本語話者のコミュニケーションにおけるスタンスの違いから考察した。そして絵本というジャンルにおけるテキストの中にも、両言語のスピーチ・イベントのとりえ方の違いが反映されており、それが子供の言語習得に影響を与えるものとなっている可能性を示唆した。



本稿は、一絵本のテキストをデータとしてテキスト全体を見ることで日英語版の語り手の視点の違いを明らかにしたが、データを一作品に限定したため、一般化することは難しい。今後は原本と翻訳本といった対照研究ではなく、それぞれの言語における複数の絵本テキストをデータとした分析を試み、両言語における社会文化的・非指示的意味に注目した言語使用の特徴を明らかにしていきたい。

### 参考文献

- 甘露統子 (2004). 「人称制限と視点」『言葉と文化』第5号, 87-104.
- Berman, R. A. & Slobin, D. I. (Eds.) (1994). *Relating events in narrative: A crosslinguistic development study*. New Jersey: Laurence Erlbaum Association.
- Chafe, W. (Ed.) (1980). *The pear stories: Cognitive, cultural, and linguistic aspects of narrative production*. Norwood, New Jersey: Ablex.
- 灰鳥かり (2005). 『絵本翻訳教室へようこそ』研究社.
- 井出祥子 (1998). 「文化とコミュニケーション行動：日本語はいかに日本文化とかがわるか」『日本語学』第17巻, 第11号, 62-77.
- 井出祥子 (2006). 『わきまへの語用論』大修館書店.
- 池上嘉彦 (2000). 『「日本語論」への招待』講談社.
- 牧野成一 (1978). 『ことばと空間』東海大学出版会.
- 水谷信子 (1993). 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』第12巻, 第4号, 4-10.
- 森田良行 (1998). 『日本人の発想、日本語の表現：「私」の立場がことばを決める』中央公論社.
- 守屋三千代 (1992). 「小説の『語り』と『文法』：人物呼称との相関」『講座日本語教育』第27巻, 108-122.
- 中村桃子 (2007). 『〈性〉と日本語：ことばがつくる女と男』NHK ブックス.
- Ochs, E. (1986). Introduction. In B. B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language socialization across cultures* (pp. 1-13). New York: Cambridge University Press.
- 白川博之 (1992). 「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』第77号, 36-61.

58 絵本における語り手の視点：英語絵本とその日本語翻訳の質的分析〔成岡 恵子〕

Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In K. Basso & H. Selby (Eds.), *Meaning in anthropology* (pp. 11-55). Albuquerque: University of New Mexico Press.

菅沼文子 (2001). 「テキストにおける語り手の働き：『注文の多い料理店』とその英訳版の比較対照」『日本女子大学英米文学研究』第36号, 71-91.

使用データ

Parenteau, Shirley (2012). *Bears in beds*. Illustrated by David Walker. Somerville, Mass.: Candlewick Press.

パレントー, シャーリー (2012). 『おやすみくまちゃん』デイヴィッド・ウォーカー (絵), 福本友美子 (訳) 岩崎書店.

—なるおか けいこ・法学部専任講師—